

ハワイ日系日本語文学小史

——文芸誌を中心に——

篠田左多江

はじめに

日系日本語文学の歴史は明治元年ではなく、自由移民の時代から始まる。初期の官約移民、私約移民時代に、移民たちは耕地で過酷な労働に明け暮れ、宿舎では食べて寝るだけの動物的な生活を強いられたので、文学を楽しむゆとりはなかった。しかし20世紀にはいると、働いて金を貯め、錦衣帰郷を夢見る移民だけでなく、別の目的をもった者が少しずつ増え始めた。彼らは大多数が若い男子で、世界を見て視野を広げ、学びたいという意欲に燃えていた。彼らはアメリカ本土やヨーロッパへ行くよりも、まずもっとも近い外国であるハワイへ行き、自らの可能性を模索していた。

日系日本語文学は3期に分けて考えることができる。

第1期は、先に述べた自由移民の時代に始まり、1916年頃文芸誌を支えた若者たちが勉学のためにアメリカ本土へ去るまでの時期。第2期では、すでに定住して経済的に安定した人々が、短詩系文学会を立ち上げ、新聞の文芸欄に作品を投稿するなどして日本語文芸を受け継いでいった。現在でも残る潮音詩社のような短歌結社の基礎がつくられ、ごく少数だが女性文芸同好会やプロレタリア文学同盟も出現した。第3期は戦後である。文芸を支えていた人びとの多くは戦中に抑留所へ送られ、その後日本へ帰国した者もいた。代わって、軍人花嫁¹⁾や戦後移住者、婦布二世²⁾など日本語を母語とする人びとが増加した。日本から文芸雑誌がどっと輸入され、ハワイの日本語文芸を維持する情熱は次第に失われていった。いくつかの文芸誌が発行されたが、短命に終わり、次第に英語の創作が主流となった。

第1期については、拙稿「黎明期のハワイ日系日本語文学」(『移民研究年報』2007年3月)のなかですでに明らかにしているので簡略に扱い、本稿では第2期、3期について述べることにする。

1 (1) ハワイの初期文芸運動

前述の第1期にあたる初期の文芸運動について簡単に述べることにする。

ハワイ、合衆国本土を問わず、移民文芸の第1歩は新聞から始まる。移民が居住して20年後に初めて新聞が発行されたロシア・ウラジオストックのような例外³⁾はあるが、日本人はいずれの移民地でもまず新聞を発行した。ハワイ最初の新聞は、『日本週報』⁴⁾であるが、現存するのは1893年2月に発行された第35号のみである。この号をみる限り、この中には文芸欄などはみられない。1893年といえば、ハワイ王国が欧米列強によるハワイ獲得の嵐に飲み込まれていた時期である。まだ日本人に文芸を楽しむゆとりはなかった。新聞に最初の文芸欄が登場する

のは、1895年に発行された『やまと』⁵⁾の「やまと文苑」であった。ここには短歌・俳句・狂歌なども載っていたが、内容に目を向ければ「啼きもせず 雲井に入るや 時鳥」といったようにハワイの風物ではなく、日本文学の再生がほとんどであった。

ハワイには初期のころから「ホレホレ節」という耕地労働者の生活から生まれた俗謡があったが、こうしたものは取り込まれていない。これは耕地で働きながら人びとの口をついて出る感情を素直に表した七七七五の歌である。テーマは望郷、日々の生活、恋愛、耕地の監督を揶揄して憂さを晴らす、休憩時に見出すわずかな楽しみなどであった。

1 (2) 『愛友叢誌』と『火星』

ハワイでは合衆国本土に比べて多くの雑誌が創刊されたが、現在、図書館や資料館などに収蔵されているものは少ない。日本の雑誌を容易に入手できたため、ハワイで発行された雑誌を大切に保管しなかったこと、保管されていたとしてもシロアリの被害に遭い、捨てられることが多かったためである。筆者も文芸愛好家に古い雑誌があるかと尋ねると、シロアリがついて捨てたと言われ、落胆した経験が何度もある。したがって、失われた文芸誌の存在は広告や新聞記事から推測することになる。

1902年、歌人相賀溪芳（安太郎）を中心に「布哇文学会」が発足した。ハワイで最初に発行された文芸誌『蕉影』は、相賀が社長をつとめる『やまと新聞』社から発行された短歌文芸誌である。

本格的な文学運動と言えるものは、1908年に発行された『愛友叢誌』と翌年の『火星』から始まる。奥村多喜衛牧師⁶⁾は、1904年にマキキ・キリスト教会を設立。信者のための愛友会をつくり、夜学校で英語を教え、スクールボーイなど勉強のできる環境の仕事で斡旋し、図書室を設けて日本から取り寄せた新聞、雑誌類を自由に読めるようにした。1910年頃のホノルルには日本語の書籍を売る専門店はなく、薬局の片隅で取り扱われていたという。⁷⁾このような状況下で設置された図書室は、青年たちにとって貴重な勉強の場になった。奥村は文芸活動を通じて青年たちの墮落を防ぎ、キリスト教信者として育てようとした。のちに『火星』を創刊した増田玉穂^{ぎょくすい}（貞太郎）⁸⁾は当時の青年たちについて「目先の利害を見るには随分鋭利な眼識を備へているが、理想だとか信仰だとか皆無といっても過当ではあるまい」⁹⁾と書いている。

教会には知識欲に燃えた青年たちが集まるようになり、奥村は『愛友叢誌』を通じて文学運動の芽を育てたのである。なかでも浅海吾市¹⁰⁾、尾籠賢治¹¹⁾、川崎寅雄¹²⁾の3人は目立った存在で、「布哇文壇の3天才」と呼ばれるようになった。3人はそれぞれ浅海蘆風、尾籠狂花、川崎芥南^{かいなん}という筆名を使って創作に励んだ。まず最初に彼らは、望郷の想いにさいなまれつつ、故郷の思い出を書き、次第に自らが身をおくハワイ社会に目を向けるようになった。彼らはスクールボーイとして通学し、ある程度英語力を身につけると教会の図書室で欧米の文学作品を読みあさった。次第にラフカディオ・ハーン、ワシントン・アーヴィング、エドガー・アラン・ポオ、ヘンリー・ソロー、アルフレッド・テニスンなどを読破するようになり、作品の抄訳や伝記の作成も試みた。当時のハワイ日系社会にはなかった欧米の教養を身につけた青年たちの出現であった。

文学運動に貢献したもう1つの文芸誌は『火星』である。俳句結社「ヒロ蕉雨会」のメンバー

である増田玉穂が中心となって創刊したが、初期には俳句だけでなく、小説、論文なども投稿するようにと勧めていた。つまり『愛友叢誌』はキリスト教と文芸によって、『火星』は文芸によって青年たちを指導することを目指した。青年たちはこれら2つの雑誌に競い合って投稿した。低俗で卑猥な読み物が好まれた社会に、新しい文芸が誕生したのである。

ハワイの文芸活動において、『火星』の果たしたもっとも大きな役割は、その活動が『ハワイ歳時記』（早川鷗々の私家版）の出版につながったことである。これまでは日本の歳時記を使って作句していたが、それではハワイの実情に合わなかった。日本と違い、はっきりした四季はなく、花も木もまったく違う。ハワイで詠まれた句から季語を取り出す作業は難航をきわめたが、1913年、『ハワイ歳時記』はついに刊行された。これはまさにハワイ日本語文芸の始まりといえよう。

『火星』が創刊されたのは、5月から7月までのオアフ島大ストライキの2か月後であった。プランテーション（以後は耕地）労働者の意識も大きく変わっていく時代であった。しかしながらストライキ関連の記述は皆無である。同人たちは耕地とはなんらかの関わりをもっていたはずであるのに、それに目を向けなかったのはなぜであろうか。ストをやめて職場へ戻るよう労働者を説得していた奥村牧師の影響のみとは考えにくい。尾籠は回顧録¹³⁾のなかで、そのころは耕地労働者の生活は分からなかったが、町全体の緊張感が自分にも伝わったと述べている。しかし彼の関心は、ストにより労働者の待遇が改善されるかではなく、アメリカ人の反感を買って、排日運動が起こるのではないかということにあった。

この後も『ウキクサ』¹⁴⁾、『高潮』¹⁵⁾などの文芸誌が続いたが、いずれも短命に終わった。東京生まれで、慶應義塾大学在学中にスタンフォード大学へ留学、のちにハワイへ渡った井田東華（平、王白石）は、1911年10月に『高潮』を創刊。これは純文芸誌で洗練されたものだったというが、現在では残っていない。井田はこの時30歳で、尾籠たちよりもかなり年長であった。評論「布哇に於ける文芸と社会」のなかで「文学は第一高尚なる思想を養ひ人の人たる所を解釈することができる・・・現在のハワイの状態では他に於るやうな文学を解する真性の読者と言ふのも極めて稀である、否皆無と云ってもよい位である」¹⁵⁾と述べ、若い人びとが文学作品を生み出す努力をし、それを真面目に批評して育てていけば、ハワイ文壇の将来は拓けるとの展望をもっていた。

評論や文壇回顧などから推察すると、この文芸誌には尾籠、川崎、浅海とともに角田柳作¹⁶⁾、田島断¹⁷⁾、増田、日本から堀口大学などが参加する当時としては最高の顔ぶれが揃っていたと考えられる。特に尾籠の「若き人々」は「島崎藤村のような深刻で、ハワイにはまったくみられなかった作品」と評されている。

1 (3) 海角文芸社と『白光』

文芸を生み出す機運が高まったなかで、『愛友叢誌』、『火星』によって芽生えたハワイの文芸は、1914年に創刊された『白光』で頂点に達する。これを支えたのが、尾籠狂花と田島断が組織した「海角文芸社」と尾籠が立ち上げた短歌結社「みどり社」である。2人は、多くの人に呼びかけて、文芸講演会を企画・運営した。その結果ここには、日本とハワイを往来していた多彩な文化人が集まることになった。

田島断（金次郎 神田謹三）は変わった経歴の持ち主である。13代目森田勘彌について歌舞伎作者の見習いをしてしたが、1909年に布哇中学の国語教師として招かれ、ハワイへ。泉鏡花の小説を愛読し、小説、評論、短歌、俳句、川柳から都都逸まで、広い範囲の文芸に造詣が深く、当時発行されていたほとんどの雑誌に執筆していた。テーマはおもに芸者など花街に生きる女性の日常や恋愛事情を描いたものが多く、青年たちにとっては遠い日本の未知の世界であった。文芸社を立ち上げた時、尾籠は25歳、対する田島は40歳で、青年たちの指導的立場であったと思われる。しかし尾籠たちは、田島の広範な知識は尊重するが、自分たちの生み出したい文芸とは異なるものであるとして、田島を乗り越えた新しい文芸の創造を目指した。

尾籠は新たな気持ちで出発しようと、筆名を「森うしほ」に変えた。これまでの文芸誌は資金難から、継続が困難であった。この轍を踏まないため、周到的な資金計画を必要としていた。これを助けたのが親しい友人の橋本みどり（伊智子）¹⁸⁾であった。これまでの文芸活動には女性の参加がほとんどなく、わずかに短詩系文学の作者に女性の名があるのみだった。橋本は当時としては珍しい『布哇報知』新聞の女性記者で、執筆だけでなく資金調達でも手腕を発揮した。彼女は、従来の良妻賢母型ではない「新しい女」として生き、平塚らいてう¹⁹⁾のような女性に憧れていたことが、そのエッセイなどのなかに垣間見える。

森は創刊のことばとして次のように述べている。「ハワイの文芸誌はほんの数号しか継続しないが、日本語文芸を生み出そうという意欲を失ったわけではなく、遺産を受け継ぎ、将来の文芸隆盛への希望をつなぐためにこの文芸誌を創刊した。」「現在の文芸はまだ幼稚で浅薄であるが、かつてないほど文芸的機運の動いている今を逃さず、全島の文芸愛好者に呼びかけ、『白光』を高尚な文芸誌にしたい」という言葉からは意気込みの高さがうかがえる。

『白光』の特徴は、ハワイ日系人社会を扱った作品が多いこと、またその外部からの投稿も掲載したことである。もちろん過去の日本での生活を描いた作品が皆無だったわけではない。堀口大学は、1913年にホノルルを旅行中の縁で参加、角田柳作は、ハワイへ渡る時の船中でフランス人教授から教えられたアナトール・フランスについて書いている。この時はすでに合衆国本土の大学に留学していたかつての「3天才」の浅海、川崎はカリフォルニアから作品を送っていた。もうひとつ注目すべきことは、家仲茂など耕地労働者のなかからもその経験をもとに短編を書く者が現れたことである。これまで文芸誌の寄稿者は、短詩系文学を除けば、大多数が勉学のためにハワイへ来た青年たち、あるいは新聞記者であった。しかし、耕地で働くうちに創作意欲をかきたてられた者も少数ながら現れたのである。

『白光』は毎月300部発行され、15セントで販売された。尾籠は第6号で「布哇文芸の向上のために何物かを貢献し得たといふ自信」をもったと書いている。さらに第7号で「私たちの努力はこれからである。今後能ふ限りの全力を注いで布哇文芸の向上につくすつもりである。」と書いた。しかし7号を最後に『白光』は終わった。

ハワイ文芸を盛んにすることは尾籠の生きが이었다。一方で、彼はもっと壮大な夢の実現のためにはハワイに留まっているわけにはいかないという思いもあった。彼は奥村牧師の助力も得て、1914年にニューヨークへ向かい、ニューヨーク大学新聞学科へ入学した。

このようにして、中心人物は、次々とハワイを去った。角田柳作も1916年にニューヨークへ向かった。1時期輝き始めたハワイ日本語文芸は、徐々に光を失っていった。橋本は尾籠の去っ

たのちも浅海の弟・青波とともに『大洋』²⁰⁾、『布哇』²¹⁾を続けて創刊するが、いずれも2号で終わった。その後、田島、橋本は日本へ帰ることになる。人びとが流動するハワイの文芸もその影響を受けた。文芸活動に熱心だった若者たちの最終目的は、合衆国本土だったのである。そこで学ぶことによって、ハワイでは得られない大きな未来が開けると期待したのである。

1 (4) 『白光』以後

『白光』に関わった人びとが去ったのち、1916年にホノルルで月刊誌『洋島』が創刊され、25セントで販売された。編集長の泉寛吾²²⁾は6年余り勤務した『日布時事』社を辞めた。²³⁾その後、記者時代の人脈を生かして日本の『中央公論』を目標に、社会評論、随筆のほか家庭欄まである総合雑誌を目指したのである。創刊号には総領事はじめ、有力者の祝辞が並ぶ。そして新聞記者、農業界、商業界などの指導的立場にいる人びとが寄稿している。さらに会社、商店などあらゆる分野の広告も並び、資金集めは順調だったと思われる。発刊の辞で泉は、世の権勢におもねることなく、いずれの勢力にも属さず、かといってひとつの思想に偏ることなく、自由に門戸を開放して、人びととともにハワイ社会の向上と発展に尽くしたいと述べている。

内容は、世界を視野に入れた製糖産業の現状、ハワイの日系農業の展望のほかに、「芸妓福龍の死」という当時の新聞を賑わしたゴシップなども扱っていた。そのほか、文芸というにはあまりにも粗末な「見よタンタラスの噴煙を」、「奥様の恋」など、故郷の恋人とハワイで再会するが、その人はすでに誰かの妻であったという新聞の文芸欄でよくみられるテーマが続く。泉の掲げる理想とは程遠い読み物だが、堅苦しい論文ばかりでなく、このような読み物も必要であるという販売戦略であろう。硬軟取り混ぜた編集のおかげで雑誌は続き、1917年の新年号は300ページを超えたという。同年7月には1周年記念のパーティが開かれた。しかし間もなくこの雑誌も消えてしまった。

2. 第2期の文芸運動

2 (1) 「晩鐘会」

1920年代は、日系社会が大きく変化する時代であった。24年の「排日」移民法の成立は、人びとにとって、ハワイはもはや一獲千金を夢みる出稼ぎ者の島ではなくなった。日系人は定住か、帰国かの選択を迫られたのである。これまで文芸を支えてきた耕地労働者や家内労働者のなかからは、新聞記者など安定した仕事につく者、商店を営む者も現れた。

この時期最初に創刊された文芸誌は、ホノルルの『晩鐘』である。これは1920年に設立された文学青年会「晩鐘会」の機関誌で、同年8月に第1号が発行された。（『日布時事』1920年8月18日付）おもな同人は青木秀作、浦田孤愁（不二夫）²⁴⁾、木原隆吉²⁵⁾、黒川佳正、古明地利輔、古屋翠溪（熊次）²⁶⁾であった。この時、新聞記者は浦田のみ、古屋と古明地は家具商であった。筆者はこれを重要な文芸誌と考え、長い間探したが、とうとう見つからなかった。木原が所有していたが、独身で亡くなったため、遺品を整理した人が古い雑誌として破棄したのかもしれない。黒川、古明地の子孫にも会ったが、先祖が文芸活動をしていたことさえ知らなかった。その存在証明は、創刊を伝える記事や回顧録に依拠するしかない。

晩鐘会の細則は次のように記されている。

我等は純にして真摯なる心を以て凡てを考究せんことを期す。

我等は時代の推移に順応して、人間生活の充実、向上せんことを期す。

我等は常に青年としての立場を保持し、以て我等の使命を遂行せん事を期す。(川添樗風『移植樹の花開く』p.383)

リーダー格の古屋のみが31歳で、青木は23歳、浦田、木原は22歳であった。彼らは真面目に人生を考え、つねに向上心をもっていたのであろう。商人として経済的に安定した生活を送り、短歌や俳句を詠み、文学を語ったのである。第1号には「現代思想と青年の立場」、「同胞と衛生思想」などの論文が掲載され、青年の力でハワイ日系社会を変えていこうとする意気込みが感じられる。しかしその後、晩鐘会についての記事はまったくない。1号で終わったのかさえ不明である。古屋は戦後になって、回顧録『移民のらくがき』(1968年、布哇タイムス社)を出版し、田島断の思い出や、自身の自由律俳句について書いているが、『晩鐘』についてはいっさい触れていない。

2 (2) 『地響』と『カマニ』

1920年代の文芸誌には『地響』と『カマニ』がある。『地響』は、1922年9月、吉田のぶじ(信二)²⁷⁾らによって創刊された。吉田は純文芸誌をつくりたいと思い、日本から送られた10冊ほどのミメオグラフの文芸誌を参考に研究し、地響詩社を立ち上げて、隔月に発行することを決めたという。20年代、ハワイ文壇は活気がなく「淋れ切って」いるのを何とか建て直し、かつての文壇隆盛期に戻したいと吉田は抱負を語っている。(『布哇報知』1922年9月21日付) 同人は吉田のほか、嘉数南星、児玉修三、豊平走川(南馬三朗)²⁸⁾、見田宙夢²⁹⁾、山下草園³⁰⁾の6人。ほとんどが新聞社勤務で、初めてのミメオグラフ印刷にも苦労したという。営利目的ではなく、愛好者に無料で配布した。これまでの文芸誌と異なり英文のページもあった。第2輯は同年12月、第3輯は23年5月に発行された。

入手できた第2輯をみると、黒地の表紙には火山のなかから現れる女神像を描いた版画が、内部には同人の写真が貼りつけられている。表紙や扉の絵はすべて吉田のぶじが描いた。ミメオグラフの字は薄くて読みにくい、手作り感のあるユニークな装丁になっている。豊平「小売商人」は、パイナップル農園で12年間辛抱して貯金し、小さな店を開いた日本人の物語。ストのためにフィリピン人労働者からの売掛金を回収できずに店は倒産。妻の呼び寄せも親への送金もできず、つらい思いを忘れようと町はずれへ歩いて行く。工事現場で岩を爆破しているところに遭遇し、危ないという声にも耳をかさずに、吹き飛ばされて死ぬという、なんとも救いようのない話である。見田は「偶感随想」のなかでかつて耕地の長屋に住んでいた経験から、酒の密造、アヘンの輸入など、法をかいくぐり、悪事を働いても金さえもうければよいという生き方を目の当たりにして、子どもたちの将来を心配している。そのほか、山下の戯曲「或る日の監獄」、吉田「犬」など暗い話ばかりが続く。同人の短歌も多く掲載されている。この雑誌も理想は高かったが、いつのまにか3輯で消えた。

『カマニ』は1922年に結成された潮音詩社の同人誌である。1924年2月21日、編集委員、豊平走川・里川ひろし・佐藤芳山³¹⁾・吉田のぶじの4名のもとで創刊された。隔月発行で、広告

は精選してあまり数多く載せないと決定した。委員はすべて新聞記者である。短歌会の同人誌であるから内容の大部分が短歌とその批評、万葉集やその時代の著名な歌人の作品鑑賞などで占められているが、創刊号には短編小説や随筆も含まれている。いずれも歌人らしく、作品のなかでは巧みな自然描写が多い。創刊号の里川ひろし「労働者の群れへ」は、「或長編の中より」と副題があり、長編小説の抜粋と思われるが、1回の掲載で終わっている。父の呼び寄せでハワイへやってきた文夫が久しぶりに父と会い、日々の過酷な労働に日焼けして「廃残の影のような」父の姿に愕然とする。父に会えたことは嬉しかったが、父の周囲にいる労働者たちが低俗な話に興じ、文化とは程遠い生活をしているのを見て、ハワイ生活への期待感を失っていく。しかし若さにあふれた女性が馬車で迎えに来てくれて、父の住む耕地の集落へと向かう。その途中の文夫の気持ちやあたりの自然を描いた佳作である。

豊平走川の随筆「マンゴ樹下にて」は、豊平の「自然の恋人」であるマンゴー樹を春、夏と描写する。マンゴーは日本の桜と同様、その赤い若葉が春を告げる。夏には実が熟れて、溢れる生気を抑えている若い女性のようなのである。そして夜になると、黙して立ち、哲人となるという。短い文のなかに木への愛情を的確に表現している。

第2号はすべて短歌に関する記事で占められている。第2号以降は入手できなかったため、論じることはできないが、第6号まで発行されたと新聞に書かれている。

2 (3) 新聞紙上にみる耕地の文芸

1909年のオアフ島第1次ストライキの後、耕地労働者の意識は次第に高まり、新聞に文芸や評論を投稿するようになった。しかしすでに述べたように尾籠たちの文芸活動では、ストライキをテーマに書くことはなかった。

ハワイへ来た労働者は大多数が尋常または高等小学校卒ほどの学歴で、中学を卒業した者は少なかった。文芸活動は労働の合間にも書き留められる短詩系文学が中心であった。オアフ島エワ在住の石栗奴の奴（半九郎）³²⁾は、郷里への手紙を書くことさえできない人びとに手紙の書き方から始めて、次第に俳句をつくる楽しみを教えた。エワ耕地では俳句が盛んになり、新聞にも多く投稿された。

人びとの読み書き能力が高まるにつれ、新聞に意見を投稿する者も現れた。耕主のもとで働く単純な労働者から抜け出し、耕主から甘蔗の収穫を歩合で請け負う「請け黍」の仕事をする人びとも出現。そのなかの1人、エワの佐藤芳山は、1919年秋、「奮起せよ同胞青年」と題して、青年たちに労働者としての自覚を促した。（『日布時事』1919年10月26日付）労働者と資本家には平等な富の分配を受ける権利があると主張し、各地の青年会が結束して行動を起こすよう励ましている。同じ紙面の記事で、エワの神保源次郎は「耕地労働者の自覚を促す」（『日布時事』1919年10月26日付）のなかで、物価は高騰し労働者の生活は悲惨なものになっている一方で、砂糖の価格は高騰、輸送費と肥料代は下がっており、耕主は莫大な利益をあげている今こそが、労働者が結束して増給の声を上げる時であると説いている。

里の人というペンネームで書かれた「汽車待つ人々」は、耕地の角で帰宅の列車を待っている人びとを描いている。母親たちは一刻も早く託児所から子どもを引き取り、帰宅して夕食の支度をしたいと思い、男性の労働者たちは増給運動の相談をしている。当時の耕地の様子が生

き生きと描かれている。作者は、日本に父親を残して出稼ぎに来ていると思われ、同じ紙面に載る詩「送る手紙」では、人びとが寝静まった深夜に故郷の父に宛てて、現在の自分の寂しい生活を書き送る心境をうたっている。ペンネームで書かれているので確証はないが、おそらく佐藤芳山と同一人物と思われる。佐藤は、ハワイに根差した移民地文学を提唱した。つねに労働者の側に立ち、資本家は彼らのおかれた状況を分かっているのかと問いかけている。

同じくエワの豊平走川は、短編「彼等の権利」で、耕地労働者夫婦の窮状を描く。耕地労働者の立花は、生活費、頼母子講への拠金、故郷の両親への仕送りなどで余裕のない生活を送っていた。立花は中学で学んだにもかかわらず、字も書けない無学のポルトガル人ルナ（監督）に家畜のように使われるのが嫌でたまらない。それでも彼はカウアイ島生まれの心優しい女性と結婚し、妻は身ごもる。しかし彼女は体が弱く、肉体労働には向かないため、独身者の洗濯をして金を稼ぐ。彼は故郷から毎月さらに25ドルの送金を頼まれ、仕方なく妻を耕地労働者にするが、虚弱な身ゆえに病に倒れるという結末を迎える。なんと悲惨な話だが、このような労働者は至る所において、豊平は告発の意味でこれを書いた。「彼等耕地労働者は其の義務を果たすに忠實にして権利の行使を知らぬ所謂善良なる労働者である。彼等が自己の権利を悟り主張して収入の増加を計らん限りは其の生活は永久に悲惨である」と言う。

身辺雑記や古くさい女性観の恋愛小説にまじって、わずかながらでもこのような無産労働者を描いた作品が新聞に載るようになったのは、読者である労働者が権利意識に目覚めたことの証左であると言える。第1次ストライキの時とは違い、新聞も労働者側に立つ報道姿勢であった。その結果、1920年1月からオアフ島の耕地でハワイ史上最大の第2次オアフ島ストライキが闘われた。この時は、第1次ストライキとは異なり、日系人だけでなくフィリピン人労働者も加わった。すべての耕地労働者の77%が参加したと言われている。前年の12月に「布哇日本人労働団体連盟会」が発足し、耕主組合との交渉を行った。ストライキは20年7月まで続いたが、労働者は要求を実現することができなかった。これを機に日系人は耕地から出て、都市部に住むようになった。耕地に留まった人びとも単純労働者ではなく、監督や機械工になり、生活も少しずつ向上していく。

しかし都市へ向かった労働者は、苦難の道を歩まねばならなかった。さらに1924年の排日移民法によって日本人は、事実上定住を迫られた。都市でもまた、耕地時代と同様に工事現場などの単純労働を余儀なくされる者が現れる。

2 (4) プロレタリア文芸運動

新聞文芸欄にプロレタリア文芸という言葉が載ったのは、1927年3月である。北山新次郎は、「ブルジョワ文芸とプロレタリア文芸」（『日布時事』3月26日～31日の連載）のなかで、2つの文芸の違いを説明し、「・・布哇の文芸界も当然ブルジョワ文芸とプロレタリア文芸との二分野に分かれるであらうことを信じて疑わない」と書いた。

北山の予測通り、1932年1月、藤野零二を中心にハワイプロレタリア文学同盟が結成され、その機関誌として雑誌『齒車』が創刊された。誌名は製糖工場にあるクレーンの大きな歯車をモチーフにしたという。藤野は「齒車創刊に際して」（『日布時事』1月21日付）のなかで、「芸術的生産を通じてプロレタリアート解放のために闘う」と書いた。表紙、挿絵もすべてミメオ

グラフで、鉄筆は数人で担当しているため、癖のある字を書く人もいて大変読みにくい。しかしハワイにプロレタリア文学を根付かせ、労働者を啓蒙するという意欲が感じられる。『歯車』は、論考、短編小説、詩を中心に構成されている。しかし不思議なことにハワイのすべての文芸雑誌にみられる短歌や俳句はない。同誌は第4号と第7号の2冊しか残されておらず、全貌を知るのは難しい。

第4号の巻頭には、『イズヴェステシア』からの道面義夫による翻訳「ソヴィエト連邦と帝国主義日本」があり、第7号の巻頭にはスターリンの「レーニン主義の根本理論」を新谷良の翻訳で掲載している。「歯車社同人の翻訳」とあるので、同人のなかにはロシア語のできる人が複数いたようである。

創刊号がないため確認できないが、発刊の意義について、第4号で原哲三郎は「歯車誌と吾等の使命」のなかで次のように述べている。「究極の目的は芸術的生産を通じてプロレタリアートを開放することにある」とした上で、「総じて労働者・農民は学が浅く、小難しい理論を傾聴する耳を持たないのだ。・・・吾等は、一篇の詩、一篇の創作に於いて、現在社会を構成する資本主義を説明し、又資本主義のもつ無数の矛盾と欠如を指摘し、陰険なる彼等の搾取手段を暴露し、・・・最も平易に誰にもわかる容易さでプロレタリアイデオロギーを説明しなくてはならん」と言う。すなわち『歯車』はハワイの無産労働者を易しく分かりやすい作品で啓蒙するための雑誌であるということになる。日本でもプロレタリア文学の作家は、大学出の教養を持つ有産階級出身者が多い。この原の論調からもハワイでのプロレタリア文芸活動と日本のそれとの相似性がうかがえる。

彼らの政治的立場はソ連共産党への同調である。それは第4号の「布哇のオルグに対する挑戦」、「大山都夫排撃闘争」のなかを読み取れる。『歯車』同人は1932年春にハワイを訪れた社会主義者大山を排撃し、共産主義こそがハワイプロレタリアートに相応しいと主張する。彼らは大山の演説会に行き、社会主義の矛盾を質問しようと試みたが、相手にされず、逃げられてしまう。『日布時事』は講演会前に「布哇プロレタリア青年同盟は、大山氏の講演会に反対の声明書を出した」と報道したが、当日の青年たちの質問は無視された。この日を契機として、同人の結束は固くなる。

カカアコの坂本雪美「赤色テロル」は、ドイツ人監督のもと、工場の建設現場で働くフィリピン人、ハワイ先住民（作品中はカナカ）、日系人を描く。土砂降りの雨のなかでの作業を強いられる労働者が、団結して会社と交渉しようとした矢先、会社側の懐柔作戦で、多くの仲間は離れていき、交渉は頓挫する。裏切られたと知った日本人労働者が最後には監督を殺すという結末である。労働者の状況をじっくりと見て、戦略を模索するよりも、せかせかと短絡的に殺人に至るまでを描くこの作品には、労働者の団結を促しても成果が得られない作者の焦りが反映されている。

第7号について編集者は「さらに充実した」と言う。レーニン主義の説明を載せる際、翻訳者はロシア語の原文が難解なので、それを読者に分かるように平易な日本語に翻訳するのは容易ではなかったと述べ、まじめな努力の様子がうかがえる。道面義雄「米国インテリゲンチヤーの目醒め」は、アメリカのジョン・リードクラブを紹介し、パラマの1父兄より「連合寄付金募集と学校費」のような地域社会の矛盾を訴える投書もある。

仲田正三郎「道徳」、金山岩雄「軍縮会議の真相をあばく」、徳永直「オリンピックとは何か？」の3篇は、日本の雑誌からの転載である。徳永は「太陽のない街」でデビューした日本で活動するプロレタリア作家。オリンピックはブルジョワスポーツの祭典であり、新聞が毎日報道し、民衆は夢中になることで日常生活の不満も忘れてしまうと述べ、ソ連の労働者スポーツ大会「スパルタキアード」（正しくはスパルタキアード）は真の意味でのプロレタリアのスポーツ大会であると主張する。このように編集者は、ハワイ労働者からの投稿の少なさを補うため、日本の雑誌記事を転載せざるを得なかった。誌面には、同人に対し必ず投稿するよう促す呼びかけが多数みられる。募集原稿のジャンルは「小説、詩、随筆、感想、論文、実話、記録、報告」と多岐にわたる。編集者は、砂糖耕地やパイナップル工場の労働者が自分の考えを発表し、それによって労働者の団結をはかり、資本家に対抗して闘い、少しずつ生活を向上させていくことにつながると主張する。

第7号には、竹之浦清「パイナップル工場の帰り」、「砂糖と移民労働者」（いずれも詩）がある。パイナップル缶詰をつくる労働者は、工場の目の前にある労働者の町で子どもたちが飢えているというのに、不況で売れなかった缶詰を焼却処分にする矛盾を告発している。江道清「砂糖と移民労働者—或る移民労働者の実話—」は、楊行李1つ背負ってハワイへ来た労働者に焦点を当てる。彼は、砂糖耕地で過酷な労働をした挙句、貧民街でどん底の生活をし、死を待つだけの老人となる。江道は、それでも団結して闘えば、必ず夜明けは来ると説いている。

「赤色戦線」では、日本においてプロレタリア作家同盟への弾圧が激しくなり、投獄された中野重治、壺井繁治ほか多くの作家たちに対して、葉、古本、古着、手紙などの支援物資を送って「物質的ヘルプ」をすべきだと論じている。さらにハワイでは、日本語新聞などの仲介で、日本の陸軍省へ義捐金を送り、政府から感謝状を受ける人は多くても、東北地方の困窮した人びとにお金を送る人はいない。戦争のための献金をするよりも欠食児童が多くいる現在、その人びとに手を差し伸べるのが先であろうと説く。

ハワイ労働運動のなかから生まれた『歯車』は、一般の文芸誌や新聞とは視点が違うことは明らかである。編集者は、日本のプロレタリア文学誌や合衆国で同じ思想をもつ日系人によって発行されている『同胞』、『労働新聞』などの取次もして、多くの人に同盟の趣旨を理解させる努力をした。

ハワイの文芸界では『歯車』を「マルクス思想にかぶれた若者の雑誌」として無視する者が多かった。一方で、示唆を与える動きもあった。ワイパフの今中三郎は、「労働者の心—歯車同人に与ふ」（『布哇報知』、1932年7月17日付）のなかで、ハワイと欧米の労働者の状況の違いを認めて、これに合った闘いを生み出さなければならないと述べている。村田くさをは「歯車四号を見る」（『布哇報知』、1932年7月17日付）のなかで、プロレタリア青年同盟の結成は、ハワイの文芸界に一石を投じ、影響を与えたと評価した。『歯車』は、粗末なミメオグラフの雑誌だが、労働者のものであるから、稚拙でもかまわない。藤野は留学生で耕地労働の経験をもたないため、彼が声高に主義主張を叫んでも一般の労働者の心には響かないと忠告した。藤野が編集後記でつねに、どんなに稚拙なものでもよいから、労働者自身が書いた作品を投稿するようにと再三呼びかけているのは、村田の忠告を受け入れているからであろう。

日本の著名なプロレタリア作家との交流もあった。「何が彼女をさうさせたか」の戯曲で有名

な藤森成吉³³⁾は、ヨーロッパからの帰途ハワイを訪れる。歓迎会開催の案内が第4号に掲載されている。

わずか2冊の雑誌から、文学同盟の全貌を把握するのは困難である。この後同盟がどのような展開をしたかは分からない。ハワイの新聞各紙は、日本における左翼勢力弾圧に屈して自主規制をしたのか、その後のプロレタリア文学同盟についての報道はまったくみられない。

3. 戦後の文芸活動

3 (1) 『鎖』^{かなしき}

ハワイでは合衆国本土のような日系人強制収容は実施されなかったが、多数の二世が志願兵となってヨーロッパ戦線で戦い、その多くが戦死した。日本語新聞の記者で、指導的立場にあった一世、二世のなかには抑留所へ送られた者もいた。戦後、帰化法の改正で一世も合衆国市民権を得られるようになった。兵役を終えた若者のなかには、GIビルと呼ばれる奨学金を得て、ハワイ大学や本土の大学へ行き、学位を取る者もいた。相変わらず多少の人種差別はあったものの、日系人の社会的地位は向上した。1948年頃から、日本でアメリカ軍属と結婚した「軍人花嫁」も到着し、数少なくなった一世に代わって、日本語の読み書きが完全にできる人の数も増加する。日本との交流も盛んになり、芸能人や作家たちも頻繁にハワイを訪れるようになった。

ハワイに住む日系人は、次のように分類される。出稼ぎでハワイへ行き、労働に明け暮れ小学校卒程度の学歴をもつ一世、最長で20歳くらいまで日本で育ち、親の呼び寄せでハワイへ行った「呼び寄せ一世」、日本で教育を受けたことのない純二世、三世、軍人花嫁および教育のため日本へ行き、多くは戦後になって日本から帰った帰布二世、日本の公務員、会社員、留学生などの一時居住者。戦後、一世は減少していき、日本語文芸を担う者は呼び寄せ一世、軍人花嫁、帰布二世になった。軍人花嫁はそのバックグラウンドも多様で、女学校出身の文学好きな女性は、短詩系文学会の同人になった者も多い。戦後ハワイの日本語文芸活動は、このような多様な人びとに支えられた。

戦後いち早く創刊されたのは、日本文化の総合雑誌とも言うべき『鎖』である。これは1947年初めに大井つねひで（常英）が立ち上げた。大井は日蓮宗の僧侶で、YMCAに模したYBAを組織して、若者を指導していた。さらに戦後の日本へ援助物資（ララ物資）を送るなどの運動もしていた。戦中、大井はサンドアイランドを皮切りに、ニューメキシコ州サンタフェ、テキサス州クリスタルシティの抑留所を経て、最後はカリフォルニア州トゥーリレイク隔離収容所へ送られ、終戦まで過ごした経験をもつ。

『鎖』はミメオグラフであるが、字が揃って整然と書かれていて読みやすい。創刊号が入手できないので、4月に発行された第2号をみることにする。この雑誌の目的は「只単に風雅にあそび、詩を弄玩せんとするものではない。自らの魂をこの鎖の上に乗せて鍛えていく」ことであった。鎖とは「かなとこ」とも呼ばれ、熱く熱した鉄を乗せて叩き、鍛えるための道具である。

抑留された文芸人が当時の思い出を寄せている。古屋翠溪はウィスコンシン州キャンプマコイに収容されていた。古屋は司令官のR中佐が大変親切な人で、午後9時の消灯後に収容者たちを起こし、オーロラを見せたというエピソードを「極光」のなかで書いている。ハワイでは

到底見られないオーロラを中佐の厚意でみる事ができたことは、つらい抑留生活のなかの心温まるひとときであったと思われる。尾崎無音（音吉）³⁴⁾は大井と同様、サンタフェ抑留所から、トゥーリレイク隔離収容所へ送られ、4年間の抑留生活を送った。そのなかでミス・アレンという流暢な日本語を話す宣教師に出会った。尾崎は、日本人を心から愛し、戦後の荒廃した日本にわたって日本人の力になりたいという彼女の生き方に感動したと、随筆「塵埃集」に書いている。2人とも敵・味方を超えた人間の優しい心に感動を覚えたのであろう。第3号には、松井右衛門の短歌「抑留所生活断片」がある。戦争直後に発行された文芸誌であるが、抑留所関連の作品は前記3篇のみである。

この雑誌は大井がひとりで編集したもので、短歌、俳句がほどよい分量で掲載されている。日本から室積徂春が「平明居近詠」として自由律俳句7句を寄稿している。『鎖』は自己を磨き、鍛えるのが目的であるから、『奥の細道』や『万葉集』についての啓蒙記事もある。さらに精選料理のつくり方、生花についても詳しく書かれている。大井は第3号で体調不良と書いている。これ以後は新聞紙上の情報もないので、3号で終わったのかもしれない。しかしハワイ文芸を再開しようと、戦後すぐに創刊された雑誌として記憶すべきものであろう。

3 (2) 帰布二世の文芸誌『道草』

戦中、日本に居住していたハワイから日本への留学生は戦後にハワイへ帰る。彼らのなかには、幼いころから日本の祖父母の元で育てられた者、1930年代にハワイで成功した親に、日本の女学校や大学へ送られた若者もいた。しかし日米戦争となり、彼らは日本に取り残されてしまった。戦後、1947年から合衆国市民の帰還が開始され、4月1日、最初の帰還船マリン・リンクス号が、37名の二世を乗せてホノルルに入港した。その後、次々に総計約3,000名が帰ったという。

戦争中の日本で合衆国市民は、人によって多少の差はあっても、敵国人としてスパイの烙印を押されたり、特高警察につきまとわれたりというつらい経験をもつ。しかし希望を抱いて帰ったハワイでも、彼らをバラ色の生活は待っていなかった。彼らはしばらく離れていた兄弟・姉妹とは価値観が違っていった。さらに日本語が母語になっていたため、家族との意志の疎通もうまくいかず、違和感をもった。そこで同じ境遇の若者が集まって、49年1月から準備を始めて「二世交友倶楽部」が発足、6月に会誌『道草』を発行した。この時は会員が44名であった。巻頭言には雑誌名を決めた理由が次のように書かれている。「・・・私たちの今のところが、あの道傍に踏まれても踏まれても、猶生長を続け、遂には可憐な而も美しい花を咲かせる道草の心に似通ってゐる事を発見しました。」会員はお互いに意見を交換し、ともに向上したいと真摯な気持ちを述べている。各自が自筆の原稿をもち寄り、表紙、挿絵なども入れ、ミメオグラフで作られている。印刷と編集アドバイスは、YBAの大井常英師が引き受けた。出来上がると合評会を開き、作品を検討したらしく、筆者が入手した会誌には、「この表現は分かりにくい、意味不明、漢字が誤り」などの書き込みがあり、執筆者が集まって真剣に議論した様子が見える。

創刊号には杉原進³⁵⁾「人間と空間」、山下ヨシ子「音楽の研究」、大嶺美代子³⁶⁾「Jane Austin, *Pride and Prejudice* の書評」など学生時代のレポートのようなものがある。大嶺美代子は「夏に想ふ」で、ハワイの自然は美しいが、日本のように四季の変化があってこそ「生」の喜びが感じられると、日本の生活を懐かしむ。彼女は、京都女子専門学校（現京都女子大学）で日本文

学を学んだためか、京都の四季に比べ、ハワイの自然に失望すると書く。玉城文子³⁷⁾「苦しさの中から」には、日本では1日も忘れることのなかったハワイへやっと帰って来たのに、日本を恋しく思う気持ちに苛まれる苦しさが表現されている。玉城は、両親の出身地名護市の女学校へ留学した。その後、東京女子専門学校（現東京家政大学）で家政学を学んだ。帰って生活のために働かなければならないという現実と向き合った時、「記憶の映像に残る日本は善悪の批判を超越して彼岸のものとして次第に夢幻化して来、崇高化されて・・・」いく。しかし「日本を知り、アメリカをも知り、二者を総合して、それらを越えた第三の立場から、改めて両者を眺め直すやうになれば、それはすばらしい結果をもたらす・・・」との結論に達する。そのような立場の自分だからこそ、新しい境地を拓いていけると思い直して前へ進む。玉城は、学生時代から万葉集など短歌に興味を持っており、毎号に多くの詩や随筆を載せている。

第4号になると、倶楽部の活動も多岐にわたり、小林達吉³⁸⁾「常識研究部報道」には、読書部、音楽部、演劇部、常識研究部がつくられ、それぞれ研究会を開いていると書かれている。その成果がこの雑誌の記事にも反映されている。小林は日系人の間では有名な小林旅行社を経営し、「米国経済最近の動向」も載せている。ほかに日本での生活を懐かしむ詩が6編、この号で初めて映画評がある。戦中には輸入されなかった日本映画が上映され、大人気だったようである。原蛭雪の書評は、Toshio Mori, *Yokohama, California* を取り上げる。まず、ウィリアム・サロイアンのモリへの賛辞を紹介し、3つの短編を扱う。原はこれを読んで、自分の幸せな境遇とは比較できないほどの辛苦を経験してもたくましく生きた一世への感謝、正義感の強い二世の青年の良心的行動に感動し、兄弟げんかを扱った短編については、個人の平和が確立して初めて世界平和がもたらされるのだと言う。そのほか、律香³⁹⁾「逝きし二世」には、日本留学中に日本兵となって戦死する若者が描かれている。

第4号は創刊から1年後の1950年5月に発行された。会員は100名を超えていた。これまででもっともページ数が多く、通常の倍近い98ページもある。短歌や俳句も掲載され、山下律香「私の帰布航路」は、ハワイへ帰り着くまでの船中での苦労や喜びを語っている。朝倉楨子「逝く春の記」では日本で知った憧れの人を追い求めたが、会えないでいるうちにその人が戦死してしまい、それを知った時の悲しみが描かれている。洋子「妹を偲びて」も日本滞在中に亡くなった妹を偲ぶ随筆である。このように『道草』は文芸誌の様相を呈しており、これからが期待されたが4号でいったん発行が途絶えた。倶楽部の会員も就職、結婚、子育てなどに忙しくなったことがその理由である。（『道草』第5号「はしがき」）その後上川と玉城は潮音詩社の同人となり、2000年以降も歌人として活動を続ける。

ハワイに帰って57年目の2003年、ホノルルに住んでいた高齢の帰布二世たちが再び集まり、第4号から実に53年の時を隔てて『道草』第5号が発行された。モノクロのミメオグラフ時代は終わり、同誌はワープロやカラープリンターを使ってつくられるようになった。長年ハワイで暮らした二世たちは、次第に日本語から離れていく。英文での投稿が増えていることはそれを物語っている。レターサイズ（変型A4）のカラフルな『道草』は、お互いの健在をたたえ合う同窓会的な意味を持つものになっていた。長い年月を経たのち、再出発できたのは会員同士の結束が強かったためであろう。会員は自らを「帰米」ではなく「帰布」二世と呼ぶ。本土とは違うハワイのアイデンティティを大切に思っている証である。

戦後に創刊された唯一の文芸誌に『コオラウ』があり、1973年5月に発行された。同人の大多数は、軍人花嫁や一時滞在者など多彩な女性で、従来の文芸人とはまったく異なる個性と教養の持ち主であった。しかし中心となった毛利碧が亡くなったため、創刊号だけで終わった。字数の関係でこれについては、次の機会に論じることとする。

おわりに

ハワイにおける日系人の日本語文芸活動について文芸誌を中心に概観すると、自由移民の時代から細い川の流れのように文芸活動が続けられたことが明らかになる。しかし資料があまり残っていないことから、文芸誌の存在を新聞や本の記載などの2次資料から類推しなければならないことも多々あった。

最後にハワイ日系日本語文芸を、それを取り巻く状況、社会の特徴から考えてみたい。第1に文芸を担う人びとの流動性に注目する。ハワイは日本、合衆国本土の中間地点にある地理的な位置ゆえに、毎日誰かを歓迎して受け入れ、誰かを送り出す社会である。したがって文芸活動を担う人びとも流動した。最初の文芸運動「海角文芸社」に集まった青年たちも最終目的地の合衆国本土へと去った。

第2に指導者・真面目な批評家が不在であったことも不幸であった。カリフォルニアでは詩人・加川文一⁴⁰⁾、小説家・藤田晃⁴¹⁾のような人物がいて文芸同人誌を創刊し、つねに同人たちを支え、励まし、作品の批評をしてよりよい文芸を生み出す努力を支援した。それは特に戦中の強制収容という過酷な状況と強く共鳴した。強制収容を肯定するわけでは断じてないのだが、収容所内で落ち着いて考える時間を得た人びとが、それまでの日常生活では、なし得なかった文学への関心を高め、稚拙でも書くことに喜びを見出し、加川や藤田の励ましを得て、文芸誌発行に夢中になっていったことも事実である。収容所全体では日本語同人誌が5種あり、閉鎖までの2年以上継続して発行された。もっとも多い『ポストン文芸』⁴²⁾は終刊までに27号を数えた。

一方ハワイでは日本、日本文化と密接な関係にあった人びとが、ホノウリウリ、ハワイ島火山などに一時収容され、さらに一部が本土の抑留所へ送られた。これも戦中の文芸活動における指導者不在の原因であった。一般の人びとは自宅で過ごすことができた。日本語新聞は発行禁止となったため、文芸を投稿していた人びとの発表の場は奪われた。ハワイの一般社会では、『キング』などの娯楽雑誌が好まれていて、純文学作品を書いたとしても受け入れられる土壌がなかった。真剣な批評もなく、茶化して笑い飛ばすような評が新聞紙上に現れるだけで、作者を励まし、育てる努力はほとんどなかったと言ってよい。かつて井田東華が、若い人びとが努力して文学作品を書き、それを真面目に批評して育てていけば、ハワイ文壇の将来は拓けるとの展望を示していたが、それは現実のものとはならなかった。ハワイ文壇のなかからも次のようなコメントが出ている。大東生「ハワイで作品を書いている人は、作家ではなく文芸愛好家にすぎない」(『布哇報知』1922年11月16日付)、しだの家主「文学の根底は真理の探究にあり、ハワイ文壇は作品の質が低い」(同上)。

第3に文芸誌を支える経済的基盤が脆弱であったことも活動の継続に重大な影響を及ぼした。ハワイで発行された文芸誌の大多数は財政難により3号ほどで消えた。初期の奥村多喜衛牧師、

戦後の大井常英開教師は数少ない支援者であった。奥村は教会の施設を開放して青年信者たちを文芸愛好家に育て、大井は戦後の婦米二世の文芸活動を励まし支えた。『道草』同人は第5号で、大井師の写真を巻頭に掲げ、「先生なくして『道草』の誕生なく…先生の御恩を忘れることはできない」と謝辞を述べている。

第4に作品のテーマは日系社会に限られ、多様な人種への言及と尊重が少なく、視野が狭いこと。日系以外の人びとは、耕地の監督としてのポルトガル人、共働するフィリピン人、町で見かける中国人、ハワイ先住民などであり、彼らとの連帯や共感を表すものが少ない。文芸活動を担った青年たちも欧米の文化は学ぶが、先住民やアジア系の人びとの文化にはほとんど関心をもたなかった。

第5にハワイが日本に近く、物流の中継地点であり、日本の書籍が多く輸入されていたこと。また新聞にも日本の作家の作品が転載されていた事実も無視できない。厳密にはこれらは1930年代以降、戦後にみられる状況である。

このようにハワイは文芸活動にとって、決して良い環境であったとは言えない。ハワイの文芸活動から著名な作家が生まれることはなかった。少ない例外としてハワイ出身で日本へ帰り、耕地での経験を牧歌的に書いた作家、中島直人⁴³⁾がいる。彼はハワイ生まれで、日本文壇で認められた唯一の作家とされている。

ハワイ文芸活動の中心人物・浅海青波⁴⁴⁾は「プロレチア作家の花形 前田河広一郎⁴⁵⁾君の事」(『日布時事』1922年12月23日付)の記事のなかでハワイの状況を嘆き、前田河のような作家を1人でもよいから送り出したいと語っている。前田河は、古くから米本土で文芸活動を行い、日本に帰ったのち、1921年に『三等船客』で一躍プロレタリア文学の作家となった。その3年前、彼はニューヨークからの帰りにハワイに立ち寄り、『日布時事』の編集室に浅海を訪ね、日本へ帰って中央文壇にデビューするつもりだと語ったという。

本稿ではハワイに於ける日系日本語文芸について文芸誌掲載の作品を中心にたどった。しかし1次資料の不足から完璧なものにすることはできなかった。一方、新聞紙上には文芸欄があり、多くの作品が掲載されている。これらもまた、文芸誌上の作品に劣らず重要な考察対象であるので、後日論じる機会をもちたいと思う。また、本稿では短詩系文学も扱っていない。これらについては、島田法子による「ハワイ島ヒロ銀雨詩社に展開した日本人移民の文芸活動」および「ホノルル潮音詩社にみる日本人移民社会と移民の生活史」(いずれも海外移住資料館 研究紀要第6号・7号)の2論文があるので、そちらにゆずりたい。

注

- 1) war bride のハワイでの呼称
- 2) 日本で教育を受け、ハワイへ帰った二世。本土では婦米二世。
- 3) ウラジオストックではロシア革命後に外国語新聞の発行が許可された。
- 4) 1892年、ホノルルで小野目文一郎によって創刊。ミメオグラフの週刊新聞。
- 5) 1895年、ホノルルで創刊。石板で週2回発行。
- 6) 1865-1951、高知市生まれ。同志社神学校卒。1894年にハワイへ。
- 7) 無名氏 「図書館の必要性—本願寺図書館を一観して」『布哇報知』1919年4月5付。
- 8) 1889-1926年、静岡県出身、1907年ハワイへ。歌人、水無月会同人。

- 9) 『火星』創刊号。
- 10) 1891-1973年, 現下松市生まれ。1907年ハワイへ。1917年スタンフォード大学卒。ワシントン大学で医師の資格を取得。ハワイで開業。1927年, 京都大学で医学博士号取得。ハワイに戻ったが, 1960年日本へ帰国。
- 11) 1889-1918年, 現朝倉市生まれ。1907年ハワイへ。1914年, ニューヨーク大学で学ぶ。16年にハワイへ戻り, 17年日本へ帰国。『ジャパントイムズ』の記者となるが18年, 病没。
- 12) 1890-1982年, 岡山県生まれ。1908年ハワイへ。1916年スプリングフィールドカレッジ卒。一旦ハワイへ戻り, 再び本土へ。サンフランシスコ領事館, 満州国大使館などに勤務。1943年, 上海日本総領事。戦後は日本へ帰国。
- 13) 亡くなった後, 1921年2月から3月にかけて『日布時事』に連載された。
- 14) 1911年, ホノルルで発行された俳句結社水無月会の月刊同人誌。同人は田島断, 早川欧々, 増田玉穂など。8号で終刊。
- 15) 井田東華「布哇に於る文芸と社会」『カマニ』創刊号 p20
- 16) 1877-1964年, 群馬県生まれ。東京専門学校(早稲田大学)卒。1909年, ハワイへ。1917年, ニューヨークへ。コロンビア大学の日本研究の基礎をつくる。
- 17) 1874-1965年 本名・田島金治郎 筆名・断・神田謹三。東京都出身。1909年ハワイへ。1918年, 本願寺学園長。1920年日本へ帰り, 13代, 14代森田勘彌の支配人を務めた。
- 18) 1892-1982年 山口県生まれ。1911年呼び寄せでハワイへ。文芸活動ののち, 1916年, 結婚して日本へ帰国。
- 19) らいてうが『青鞥』を創刊したのはこれより3年前の1911年。
- 20) 1916年, ホノルルで, 橋本みどりが創刊。女性に関する記事多数。
- 21) 1916年, 浅海青波, 橋本みどりの創刊。純文芸誌ではなかった。2号で終わる。
- 22) 1889年山口県生まれ。1907年ハワイへ。
- 23) 「余が日布時事社を退社せし理由」『洋島』 p. 56-61
- 24) 1898-1984年, 熊本県生まれ。呼び寄せ一世。『布哇報知』記者。戦後はラジオ局の日本語番組制作。
- 25) 1898-1973年, 広島県生まれ。『布哇報知』の営業を担当。
- 26) 1889-1977年, 山梨県生まれ。1907年ハワイへ。耕地労働を経て家具商。戦前戦後を通じてラジオ放送に貢献。戦中はサンタフェ抑留所へ。俳人。
- 27) 1902-1986年, 柳井市生まれ。1917年ハワイへ。『布哇報知』記者。歌人で, 1922年潮音詩社設立。1926-29年, ボストン美術館付属美術学校卒。欧州派遣留学生に選ばれてヨーロッパへ行き, 31年帰布。37-38年再びヨーロッパへ留学。戦後, 『布哇報知』副社長。1970年, 宮中歌会始めに入選。
- 28) 1898-1991年, 沖縄県生まれ。1915年呼び寄せでハワイへ。『日布時事』勤務。
- 29) 1886-1968年, 新潟県生まれ。1906年ハワイへ。耕地, パイナップル工場労働, 日本語学校教師を経て, 理髪店開業。その後『布哇報知』から『日布時事』へ。
- 30) 1898-1974年, 里川ひろしの筆名も使用。広島県生まれ。1914年ハワイへ。歌人。1933年日本へ帰国。『日布時事』東京通信員。戦後は『ハワイ報知』の通信員。
- 31) 1914年頃にハワイへ。エワ耕地労働者になり, 1919年オアフ島を経て, マウイ島パイア日本語学校教師。26年「日の宮詩社」を結成。潮音詩社同人。
- 32) 1873-1941年, 現村上市生まれ。1899年ハワイへ。エワ耕地の農地試験場勤務。俳人。ハワイ最初の俳句結社「土曜会」をエワで結成。1934年日本へ帰国。
- 33) 1882-1977年, 長野県生まれ。東京帝国大学独文科卒。1927年戯曲「何が彼女をさうさせたか」で一躍有名になる。戦後は新日本文学会の設立に尽力。
- 34) 1904-1983年, 高知県生まれ。1917年ハワイ島へ。ヒロ高校中退。ヒロ銀雨詩社同人。戦時抑留を経て, 戦後『ハワイタイムズ』副社長。日本語放送にも関わる。潮音詩社同人。

- 35) 杉原進 父は福井県出身。1歳半で祖父母の元に送られ、金沢第3中学校卒。1948年にハワイへ帰る。設計士。
- 36) 結婚して上川。ハワイ生まれ、両親は沖縄県出身。マッキンレー高校卒業後、日本へ。京都女子専門学校卒。ハワイで32年間の教員生活を送り、潮音詩社同人。
- 37) 結婚後、小西エレン文子 1925年ハワイ島ピホヌア生まれ。両親は名護市出身。父はピホヌア耕地の日系人をまとめる指導的立場にいた。1937年13歳で沖縄へ。沖縄第3高等女学校、東京女子専門学校卒。ハワイへ帰り、カリヒ日本語学校の教師。結婚して夫とともに家業の水産会社を経営。
- 38) ハワイ生まれ。両親は広島県出身。小学生の時日本へ。慶應義塾大学卒。
- 39) 藤岡りつか ハワイ生まれ。両親は愛媛県出身。小学校の時日本へ。広島高等女学校卒。ハワイへ戻ってから、マノア日本語学校の校長。
- 40) 1904-1981年、山口県生まれ。父の呼び寄せでカリフォルニア州パロアルトへ。独学で詩作を学び、1930年、*Hidden Flame* を出版。アメリカ詩壇で認められる。その後、文芸誌『収穫』を創刊、戦中に収容されたトゥーリレイク収容所では、文芸同人誌『鉄柵』、戦後は『南加文芸』同人として文芸愛好家を育てた。
- 41) 1920年、カリフォルニア州ブローレー生まれ。2歳の時から静岡県の祖父母に育てられる。早稲田大学中退。40年、ロスアンジェルスへ。開戦とともにボストン、トゥーリレイク収容所、クリスタルシティ抑留所へ送られ、所内の雑誌『怒涛』、『鉄柵』に執筆。戦後は『南加文芸』同人。日本で『農地の光景』（1982年、れんが書房新社）、『立ち退きの季節』（1984年、平凡社）を出版。
- 42) アリゾナ州ボストン収容所で発行された「ボストン文芸協会」の総合雑誌。1943年2月-45年9月。
- 43) 1904年、オアフ島ワイパフ生まれ。両親は熊本県出身。1917年、母、弟、妹とともに熊本へ。早稲田大学文学部卒業後、菊地寛に師事。丹羽文雄とともに学び、1936年、短編集『ハワイ物語』を出版し、ハワイを経て37年カリフォルニア州ギルロイ日本語学校校長となったが、40年、交通事故のため死去。
- 44) 1894-1945年、山口県生まれ。浅海蘆風の弟。1913年ハワイへ。歌人。潮音詩社の創立に関わる。1919年『日布時事』編集長。1945年、阿波丸撃沈により死去。
- 45) 1888-1957年、宮城県出身。1907年渡米。ニューヨークで『日米週報』の記者となり、日英両語で雑誌に寄稿。1920年に帰国。21年『三等船客』でプロレタリア作家と認められる。

謝辞

資料を提供していただき、取材に応じてくださった皆様に御礼を申し上げます。
ピシヨップ博物館、ハワイ島日本人移民資料館、ハワイ大学ハミルトン図書館
二世交友倶楽部の皆様。

